

「ベトナム・A市の高齢者ケアの現況～B寺院における 支援者へのインタビュー調査及び視察～」(調査報告)

秋山 恵美子¹⁾ 落合 克能¹⁾ 古川 和稔¹⁾
野田 由佳里¹⁾ Donald Glen Patterson¹⁾ 井川 淳史¹⁾

1) 聖隷クリストファー大学社会福祉学部介護福祉学科

"Present Condition of Elderly Care in A City, Vietnam - From Interview Survey and Visit to Temple Supporters" (Survey Report)

Emiko Akiyama¹⁾ Katsutaka Ochiai¹⁾ Kazutoshi Furukawa¹⁾
Yukari Noda¹⁾ Donald Glen Patterson¹⁾ Atsushi Ikawa¹⁾

1) Department of Social-Care Work, School of Social Work, Seirei Christopher University

キーワード：ベトナム 国際交流 社会福祉 介護福祉

Key words : Vietnam, International exchange, Social welfare, Care welfare

I . はじめに

ベトナムでは、1986年「ドイモイ（DoiMoi:刷新）政策の導入後より、統制計画経済政策から市場原理へと転換し、国家経済の飛躍的な成長を遂げている。その一方で、所得格差による貧富の格差や地域格差、さらに高齢化の進展などが顕在化している。

ベトナムは平均寿命70.4歳（1990年）から75.6歳（2014年）と伸長し、高齢化が急速に進行している。2017年の国連推計¹⁾では、高齢化率が7.15%で高齢化社会に突入している。65歳以上が人口に占める割合が7%の高齢化社会から、14%を超える高齢社会となるまでに要する期間が、ベトナムでは16年と推測される（表1）。米国の69年、中国やシンガポールの22年、我が国でも24年と比較しても、ベトナムでは高齢化が加速していることがわかる。

| 国名 | 2010年 高齢化率(%) | 高齢化率 | | 倍加年数 (年) |
|--------|------------------|-------|--------|-------------|
| | | 7%(年) | 14%(年) | |
| シンガポール | 9.01 | 1999 | 2021 | 22 |
| タイ | 8.87 | 2002 | 2022 | 20 |
| ベトナム | 6.54 | 2017 | 2033 | 16 |
| ミャンマー | 5.09 | 2022 | 2046 | 24 |
| カンボジア | 5.03 | 2023 | 2048 | 25 |
| インドネシア | 5.01 | 2023 | 2045 | 22 |
| マレーシア | 4.84 | 2021 | 2045 | 24 |
| ラオス | 3.73 | 2039 | 2057 | 18 |
| フィリピン | 3.72 | 2035 | 2070 | 35 |
| ブルネイ | 3.66 | 2020 | 2032 | 12 |

表1 アジアの高齢化率の推移実績と予測

出典:1)国際連合「世界人口予測・2017年改訂版 [United Nations (2017) . World Population Prospects

急速な高齢化への対応が迫られるベトナムにおいて、高齢者へ提供される公的支援には、加齢を基準とした支援体制と、ベトナム戦争への貢献を基準とした支援体制の2種類がある。漸

増する高齢者人口に対して、支援対象を限定せざるを得ない現状では、多くの高齢者が利用できるのは、後者による支援体制である。その一方、戦争貢献者への支援体制は、対象者自身が戦争への貢献を証明することができなければ、対象とならない。戦争に貢献しなかった高齢者など、戦争へ貢献したことを証明できない高齢者まで支援の対象から除外されている。

本研究の目的は、将来の国際交流に向けて、中部都市A市C大学を訪問し、C大学学生のボランティア実習先であるB寺院を紹介していただいた。高齢化が進行するベトナムにおいて、中部都市A市の行政支援から外れる高齢者福祉の実態を把握するため、B寺院で尼僧2名へのインタビューと視察を実施した。

B寺院は、A市中心部より車で30分ほどの丘陵に位置し、高齢者福祉を無償で提供している寺院である。元来、ベトナム戦争によって行き場所を失った高齢者を世話することから始まったが、現在、B寺院には高齢者ケアや、家事活動を担当する尼僧約40名と、60歳代から90歳代までの虚弱高齢者と介護を必要とする女性高齢者25名が入所しており、同じ建物内で共同生活をしている。

ケアを担う尼僧へのインタビューを通し、寺院での高齢者福祉の生活を形成する役割は、どのように果たされているのかという点に関して検討をした。

II . 調査方法

1. 調査協力者

本調査の協力者の条件は、高齢者ケアに関わるB寺院の尼僧とした。調査協力者に対して、文書と口頭で内容を説明し、調査協力の同意を得た。インタビュー協力者は、A市に所在す

る仏教寺院、事業実施者の尼僧2名よりインタビューの協力を得た。

2. データの収集

2017年9月筆者らが現地を訪問し、半構造化面接によりインタビューを実施した。面接場所は、寺院の中庭に位置する事務所前テラスで行われ、面接実施にあたっては調査協力者の了解を得て、ICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。インタビューでは、緊張せず、常に自発的自然に和やかに会話できるように配慮した。

インタビューガイドの内容は、寺院での高齢者福祉実践の変遷と課題、現在の状況に関するを中心に聞き取りを行い、現況の施設の説明を受けながらの視察を行った。

3. 分析方法

録音データから逐語録を作成し、一行ごとに読み込み、類似したコードの分類からカテゴリを作成した。

4. 倫理的配慮

本研究を実施するにあたり、事前に調査協力者に、調査への協力は自由意志であること、同意後であっても中断が可能であることを文書と口頭で説明し、文書に同意の署名を得てから実施した。本調査は、聖隷クリストファー大学倫理委員会での倫理審査の承認を受け実施した(承認番号17009)。

Ⅲ. 結果と分析

B寺院での逐語録より、13コードに分類し、その内容より、【入所者の状況】【寺院でのケア】【寺院での運営】の3つのカテゴリに分類し

た。視察において3つのカテゴリに関連した写真を掲載する(寺院での撮影と掲載の許可を得ている)。

カテゴリ

【入所者の状況】

1) 身体活動状況と精神活動状況

身体活動では、虚弱によりADLが低下した寝たきりの高齢者は少数であり、精神活動では、認知症により症状が進行した末期の入所者はいない。

2) 年齢層

入所者の年齢層の幅は広く、現在60歳から98歳である。

3) 入所経緯

個人の志願者は少なく、社会福祉担当の地方公務員や親戚などの依頼が多い。家族関係に問題のある場合、本人の意思で入所することもある。

4) 入所準備

入所時、財産を持たず皆が仏の下で平等である理念が存在している。

【寺院でのケア】

1) 入所者の看取り

介護が重度になってから、2年程度で亡くなることが多く、寺院での葬儀を希望する入所者がいる。高齢者が亡くなった場合、遺体を特別室に数日間安置し、尼僧が死者を弔いの儀式を行い、最期の看取りまで寺院で行うことが多い。

2) ケアスタッフ

ケアの訓練を受けた尼僧による穏やかで心優しいケアと入所者への宗教的教育により、入所者の心が和らいている (写真1)



写真1 仏教下での生活

礼拝堂内にテレビがあり、時間により視聴している (写真2)

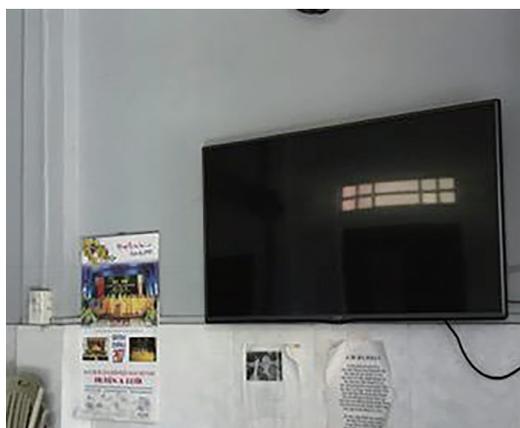


写真2 礼拝堂内のテレビ

食事は、比較的健康的な入所高齢者が当番で担当し、質素ながらも毎日健康的な食事ができる (写真3)。



写真3 食堂

3) 入所者の思い

家族のもとに外泊しても、自ら寺院へ戻ることを希望するなど、家庭での暮らしより寺院での生活を好む。

4) 健康管理

寺院には、常勤の医師看護師は不在であるが、医療が必要となった時、介護度が重度化したときのトイレ付医務室が併設されている (写真9)



写真9 トイレ付 医務室

5) ボランティア学生との関係

辛いことなど話をしない入所者は、学生ボランティアに心のうちを話す。

長時間のボランティア活動により、学生ボ

ランティアと尼僧との信頼関係も良好である(写真8)。



写真8 ボランティア大学生と尼僧

6) 行事

年1回、社会人によるチャリティ行事が行われ、専門家による宮廷音楽や舞台でのパフォーマンスが披露されている。

【寺院の運営】

1) 運営費

かつて政府が寺院を管理したが、機能できず、その結果再度寺院での管理に至った。したがって、政府の補助はなく、民間からの寄付と尼僧の私費により運営されている(写真4)(写真5)。

檀家からの支援や費用は、寺院のホームの運営にはあてていない。

大学生からも寄付を得ている。



写真4 寺院への献品



写真5 蠟燭を自作し販売

2) ボランティア

大学生の定期的なボランティア実習活動により、入所者の楽しみとなり心の安寧につながっている。大学生や近隣者のボランティア活動は、傾聴や家庭菜園、レクリエーションなど多岐に渡る(写真6)。



写真6 家庭菜園

3) 生活支援機器

寺院では、介護用品や福祉機器の予算は皆無である(写真7)。

ベッドは竹製である。床が汚物で汚れた場合、直接水を流して清掃する。

福祉用具を、献金や献品により導入していきたい意向はある。



写真7 居室

4) 医療機関の受診費用

寺院での介護が対応できなくなった場合病院へ依頼するが、基本的に治療費は入所高齢者自身が支払うことになっている。支払い困難な場合も多く、B寺院が寄付金を募って対応している。

IV. まとめ

WHO（世界保健機関）はベトナムを、高齢化の著しい国の1つとしている。既に60歳以上が約1000万人で全体の11%を占める。また国連推計の報告によると、2017年には65歳以上の高齢者が人口の7%を占め、「高齢化社会」に至った。さらに65歳以上が14%を超える「高齢社会」には2030～2035年頃に21%を超える。「超高齢化社会」には2050年頃に突入するものとみられている。この高齢化スピードは、欧米や日本を含む先進国に比べて、はるかに速いといえる。

高齢化社会の突入では、高齢者ケアの社会的準備が急務とされているが、高齢者ケアの行政の支援体制は十分とはいえない。

今回のインタビュー調査を分析した結果、次の4点が確認された。1. 寺院の私的な支援関係、2. 尼僧と宗教を通じた関係、3. 大学生のボランティアとの関係、そして4. 宗教的な支援環境

である。

1点目の私的な支援関係では、運営は地域住民など金銭の寄付、食材の寄付、自給自足による農作物による賄いなど、すべて自助で行っている。物質的豊かさはなく、十分な運営とはいかないまでも、安心できる生活は心の豊かさを生み出しているといえる。「心で介護にあたっている」と話す尼僧の言葉は、実践者として重い真実の言葉と感じた。

2点目の尼僧との宗教を通じた関係では、入所高齢者同士の摩擦も時に生じるが、尼僧が仲介し、仏教の教えを諭すことで摩擦が緩和されている。日々の生活の中での祈りを通して、他者を思いやるなど、仏教の教えを忠実に実践する場にもなっている。B寺院での精神的満足感を得た生活とは、平等の下で宗教教育が一定の役割を果たしていると考えられる。さらに、身よりがなく1人で過ごす高齢者も、家族がいながらも寺院での生活を選択する高齢者も同じ境遇にある隣人として、人間関係が形成されている。

3点目の大学生ボランティアとの関係では、小規模なB寺院の保守的な枠組みの中で、大学生ボランティアの積極的かつ定期的な導入は、互助を土台とし、入所高齢者の精神的健康に寄与していると考えられる。尼僧にも話せない事柄も学生ボランティアに話すなど、学生が関わる約60時間のボランティア実習によって、学生と過ごす時間の中で信頼関係が構築されている。

4点目の宗教的な支援の環境では、朝夕の礼拝を日課としており、入所当初は苛立ちの強い高齢者も、礼拝や尼僧からの教えにより平穏となることであった。入所高齢者も尼僧も互いに生活を支え合い、平等の生活様式の中で、相対的存在としてグループダイナミックスを形成している。

これらの関係で、B寺院では物質的豊かさは存在しなくとも、仏教の教えの下平等かつ質素な生活様式の中で、衣食住が与えられ、身体的・精神的健康の維持への心のケアが実践されていると考える。

他者の救済を前提とした仏教ではあるが、インドネシア半島にあるカンボジア・ラオス、近隣国のタイなどの国々は上座（小乗）仏教の国である。ベトナム仏教は、1000年に及ぶ中国の支配を受けた結果、大乘仏教を信仰する人が大半を占める国である^{3) 4)}。

大乘仏教は、生きとし生ける衆生全てを苦から救うことを目指し、他者の救済のために犠牲的な活動を実践する人を「菩薩」と呼び、慈悲にもとづく実践を「菩薩行」と呼ぶ⁴⁾。このように福祉を必要とする現実社会において、具体的かつ積極的な働きかけを実践している⁵⁾。

大東⁶⁾によれば、仏教の基本的な徳目は「慈悲」であり、「慈悲」は「慈」と「悲」から成る。「慈」とは、他者に利益や安楽を与えるところの慈しみを意味し、「予楽」を意味する。「悲」は、他者の苦悩に同情し、これを抜き去り救おうとする思いやり、「抜苦」を意味する。まさにB寺院での生活そのものといえる。

V. おわりに

B寺院では、個室または二人部屋で尼僧がケアを担い、専門の介護職員は存在しない。B寺院では介護が必要となった状態から、約2年ほどで最期を迎えることは、世界一の長寿国である我が国の日常生活に制限のある「不健康な期間」9～12年とは対局にあるように感じた。ベトナムの中心都市では、医療・看護・社会福祉の新しい技術が盛んに導入されつつある。

誰が訪問しても良い拒むことのない風通しの

よい開放的な住まい、飼いなれたペットの犬が放し飼いにされ、隣接された家庭菜園の様子から高齢者施設というより、助け合う共同生活のイメージが強いと感じた。清潔に環境整備された居室、食堂、身近な礼拝堂とその中にあるテレビなど、質素な生活の中に懐かしい感覚を得た。福祉用具も介護用品もなく、不便や不具合を解消するために、日本にある機器導入を最優先と考える筆者にとって、無から得ていく手段の過程やこころのあり様を考えるきっかけとなった。

経済成長の著しいベトナムの政策とは正反対に、B寺院の現状は、つつましい生活がもたらすケアの原点に戻るきっかけにもなった。

幸福感は個人異なるが、入所者同士のつながりや、大乘仏教の教えの中で衣食住が保障され生活できることは、心豊かな環境であるのではないかと思えた。尼僧と大学生の無償の優しさに触れ、人間の豊かさや原点を考えるインタビュー調査と視察であった。

謝辞：調査に関する国の許可手続きや調査協力者（教員、施設）との様々な調整など、大変お世話になりましたC大学社会福祉学部長をはじめ、調査にご協力いただいたB寺院尼僧の全ての皆様に深く感謝申し上げます。

本研究は、2017年度聖隷クリストファー大学共同研究（一般研究-7）による成果の一部である。

引用文献

- 1) 国際連合「世界人口予測・2017年改訂版 [United Nations (2017) . World Population Prospects
- 2) UN, Department of Economic and Social

Affairs: World Population Prospects: The 2012 Revision (online) ,avafrom
<<http://esa.un.org/wpp/ExcelData/population.htm>> ,

- 3) 向井啓二: ベトナム仏教について
<http://www.buddhachannel.tv/portail/?article16487> 2013/5/17
- 4) 田中浩典: ベトナム南部における上座仏教と大乘仏教の接触についての考察—ベトナム乞土派仏教側からみる「融合」の概念—
地域研究 (17) 43-61 (2011)
- 5) 清水海隆: 大乘仏教における福祉思想. 人間の福祉 第11号 47-60 (2002)
- 6) 大東俊一: 日本の福祉の原点 - 仏教社会福祉 -. 心身健康科学 9 卷 2 号 :91-95 (2013)

参考文献

古川和稔、井川淳史、柴本 勇、野田由佳里、落合克能、秋山恵美子、Donald Glen Patterson (2018) 「ベトナムとの交流に向けた現状と課題 A市におけるインタビュー調査報告」
聖隷クリストファー大学紀要 第16号
65-74